

# 婦人と子ども

第十三卷第三號

## 情の觀察

東京高等師範學校教授

佐々木吉三郎

一、子供は情の對象たるべきもの

子供は我々の智の對象たるものでなく、情の對象であるべきものである。これは子供を持つた親の態度である。従つて又教育者の態度であると思ふ。子供を智の對象としてばかり観ると、誠に矛盾の多い、譯のわからない、駄々をこねまはすものに観える。けれども情を以て観ると、皆一々尤もな理由が現はれて来る。然るに親であつて、無暗に子供を理窟でとりすべて、理窟攻めにさへすればそれで訓誡も、説諭も徹底したものと思ひ込んで居るものがある。殊にまだ子供をもつた事のない

ものが、貰ひ子などに對する教訓の仕方を見るといつも此の様なのが見つかふ。「昨日云つてあげた事がわかりましたか」解つたのならなせしませんか」と云ふ様な事の連發で、子供を論理的に征服しやうと思つて居る。又若い教師などでも往々斯様な筆法で訓誡をして、「なせ未熟な果物を食ふたか」生梅を食ふてはいけないと云ふ事を知らないか「こんなものを食べてよいと思ふものは手を揚げる」など、云ふ様に、理窟さへこね廻せばそれで教へがたつものと思ふて居るが、これはまだ一知半解の徒たるを免れない。知ると云ふものは、

人間の心の全部ではない、知つた事が必しもすぐその人間を支配して、必ずその通りに實行させるものではない、そういふものならば世の中は誠にやさしいものであるが、それは到底その通りには行かない。

兒童の研究上にも、科學的研究と審美的の研究とある。此の審美的と云ふ言葉は獨逸のウエーバー氏の使つた文字であるが、畢竟情で觀ると云ふ事に外ならぬのである。それで今智的研究即ち科學的研究と情的研究即ち審美的研究との大體とお話して兒童を觀察研究する人々の參考に供したいと思ひます。

## 二、科學的研究とは斯の如きこと

科學的研究とは或る見地から觀て缺くべからざる要素と見做されたるものだけ抜きとりて、その外の要素は先づこれを捨て去り、必要とされたる子共通の要素を合體して一の概念だとか、理法だとか原則だとかに纏めるものである。例へば酒類

を研究してみると、どの酒にも共通な主要成分と見做されるものがある。それを見出して、凡そ酒類の中には共通の主成分として、アルコールと云ふものが存在すると云ふ事を發見する。又同じ酒、葡萄酒なら葡萄酒を研究しても度々の分析の結果アルコールが百分の幾つ、水が百分の何十等と分析表を揃へて見て、夫れを、平均したものをその葡萄酒の成分と見做す。それであるから主要成分でないものを除外して捨て去るか、又は成分を盡く検査する場合でも、決して或る一回の分析で満足せずに數十回の分析を平均してそこに又共通點を見出して行くものである。それであるから何時も抽象的に一般共通的になると云ふ長處があると同時に他の一方に於て個々のものを度外視し、一つ一つの場合と云ふものを眼中に置かないと云ふ短所を現はすものである。それであるからいくら科學的分析が細かく出來ても、それは研究の一面の方面たるに過ぎない、即ち分解的、分析的抽象

的方面の研究たるに過ぎないもので、他の方面では我々の総合的構成的の研究が必要なのである。

酒を分析して研究する外に、酒の醸造法を考へなければならぬ。即ち壞す方の研究ばかりでなしに、造る方の研究をしなければならぬ。分析が如何程細かく出来ても、それを合したゞいで良い酒は出来ぬ。アルコールや、水や、他の科學的成分の外にバクテリアが何十萬匹はいつて居なければならぬまいし、いろいろな有機的の混りものがはいつて居なければ酒らしい酒とならない。それは科學的成分だけではわからない。無論將來科學が進歩したならば、その有機物までをつくり解る様な方法が発見されるのかも知れないが、今日の科學的智識の程度ではそれは出来ぬことである。藥品など入れて分析して居るうちにバクテリアなどは死んでしまふ。それでは到底よく解りさうにもない。

我々が家事や生理書などで保健食料など云つて澱粉質何処、蛋白質何処、脂肪質何処、糖分いく

らなど、定めるが、それだけを匙でまぜまぜにして飲んだら、一番立派な身體が出来るか云ふと決してそうではない。

それ故に科學的分解はなるべく精細に進まねばならぬと同時に、酒で云へば酒屋のとうじが要る。料理で云へば上手な料理番が要る。此のとうじや料理番は今日のやうな科學的智識をもつて居るに越した事はないが、併し持つて居つたにせよ、それだけではいけない、更らに今日の科學の到達し得ない部分を從來の人々の經驗や、自分の經驗に由つて補充して良い酒、旨い御馳走を拵へ上げると云ふ一種の技能を要するのである。既に世の中に存在するものを對象として、科學的研究を加へると、まだ無いもの、又は我々の理想に近いものを作り出さう、或はそこに導いて行かうと云ふ働らきとは勿論別の働らきであつて、多少共通の點はないではないが、大部分違つたものである。

運慶の作の仁王様を捉まへて、眼の玉の大きさは何寸に何寸、眼と眼との距離は願より額に至る迄の何分の一で、眼の玉の白眼と、黒眼との割合が五と三との割合であるなど、精密に鈞合を調査し更らにこれに塗つてある赤漆は十兩何匁、その下の砥粉がいくら、木材は何々の木でその成分を分折すると炭素がいくらで、水素がいくらだなど、云ふ事を研究してみるのも決して不必要とは云はないが、斯くの如き研究はその仁王様を、科學上の分子にめちや／＼にしてしまふだけのものである。今度どうぞ勇ましい逞ましい仁王様を作つて下さいと云つて水素や、炭素や、砥粉何匁、赤漆何匁木材何貫持つて來た處で決して活々とした仁王様がすぐは出て來ない。畢竟物質的に或は物質科學的に吟味しただけでは生命と云ふものはわからない。勇ましいいと云ふ状態は眼の玉の白黒の割合だとか、水素と酸素との調味加減だとか云ふことではわかるものではない。

然らば生理學者にでも聞いたら解るか云ふと生理學者もやはり一種の科學的研究者で、人間が興奮した時は血液の循環が平時よりも數倍旺盛になるとか、脈の數がどれだけ増すとか、呼吸がどれ程増すとか、要するに既に出來た或る人間の生理的狀態を調べることはするけれども、勇ましい姿をこゝに現はすことは出來ない。たとひ外の幾多の物質科學者と共同しても出來つこはない。轉じて心理學者に聞いても、それは解らない。心理學者は勇ましい場合の表情には、どんな種類があるかを分類してみることは出來やう。その寫眞なり、彫刻物なりを澤山集めることも出來やうけれど、頭や、體の筋肉其の他の模様を比較して勇ましい時の眼玉はどつちを向くとか、笑つて居る時のと比較して眼の格好がどう違ふかを調べることは出來やうが、これ以て既にあるものを分析的に精密に調べるだけで、笑はせやう、怒らせやうのと云ふことを心理學者はちつともするものではない。

ない。

#### 四、審美的研究の必要

そこで私はやはり審美的研究と云ふものが要ると思ふ。つまり科學的研究が物を壊してその要素を観るに努むるに對して、寧ろ組み立てる、作る、と云ふ方を考へ、前者が物事を分解するに對して、後者は綜合をする。前者は物を殺すに對して、後者はこれを活かす。前者は物事を平均し、抽象するに對して後者はそのまゝに觀、个性的に觀る前者は智で觀るに對して、後者は情で觀ることが必要であると思ふ。

そこで科學的研究は誰れ一人もこれを望むことは困難であつて、それ／＼専門的の修養ある人でなければ結果を得る事が困難であるけれども、審美的研究の方は直觀的、又は直覺的に子供の心を讀んで行くのであるから、子供をもつた親には、少しの注意さへ用ひれば、直に出來るものである。泣いて居る子供を見て、これは悲しいのか、可笑

しいのか、心理學者に行つて尋ねて來なければ解らないと云ふものではない。怒つたやうな顔だとか、泣つた面だとか云ふのは大抵素人でも解ることだ、心理學者程精密な理法は心得て居らないけれども具體の場合に就て、その心持を察して觀ることは素人に出來ることである。それで普通の人であつたならば、よく氣を付けて子供を観察すると大概のことは解る、若し暇々に心理學書を読むならば、殆んど遺憾なく解釋がつくのである。全くそう云ふ學理を知らないものでも、經驗的に實地に當つて、なか／＼よくさばきのつくものであることは、植物學を知らない植木屋、鑛物學を知らない彫刻家の例を思へばすぐわかるのである。繪の具の科學的の成分を知らないでも畫の大家になつて居る人も澤山ある。これは今日の植物學者、鑛物學者、化學者が對象として居るやうな智識すらないのであるが、植木屋、彫刻家、畫家の必要とする智識は持つて居るのである。植木屋風の植

物學彫刻家風の鑛物學、畫家の繪の具學と云ふものはあるのである。例へば植木屋が松を移し植ゑた時には根を踏み締めて堅くするとよいとか、水はなるべく呉れないがよいとか云ふことを知つて居る。これ等は植物を育てる方の智識で、植物を煎じたり焼いたりする智識でないのである。丁度子供にもこういう氣味合があると思ふ。子供を單なる知識の對象、科學的研究の對象と見るばかりでなしに、これを導き、これを育てるために必要な知識として、何等科學的素養なしに素人風に經驗的に覺り得た知識で、かなり立派な成績を擧げると同じ様に、教育者、父母、兄弟等も子供を育てる上、養ふ上に就て、丁度審美的の觀察、審美的の研究が必要であらうと思ふ。

##### 五、審美的研究の要訣

それには我々は知識を豊富にせんとするのみならず、寧ろ自分等の子供の時の心持、その感情、慾望等をよく思ひ起し、又今日でも常に子供の側

に立つて、子供の身の上となつて、充分の同情をこれに寄せ、その上で判斷をすると云ふことが必要である。一體科學的觀察とか、實驗とか云つても、その實驗の結果を判斷する時は、いつも自分に省みて所謂自省法と云ふものと調和して、始めてほんとうの理法が出てくるわけのものである。

純粹客觀的のものでは決してないのである。それが素人風の情で觀る方法、直覺的に心を讀んで行く方法、情的觀察の方法になつてくると、一層我身を抓つて人の痛さを知ると云ふ要素が殖えてくるので、一言で言へば慈眼を以て、愛を以て觀て行くのである。處が心なき親、同情なき教師は稍もすると自分等の子供時代と云ふものを忘れてしまつて勝手な、自分に都合のよいやうなことはかりを覺えて居るものである。自分の過去のつまらなかつた事、しくじつた様なことは忘れて、得意であつた、一寸人に聞かせて自慢でも出来るやうなことはかり覺えて居つて、自分が小さい時

はお辨當の叱言などは一遍も云つたことはないとか、絹の着物などは一度も着たことはなかつたと云ふが、併し子供の時は、おいしいお菜があつた時非常に嬉しかつたとか、よい着物を着せられた時に雀躍をして、まづい着物を着てお友達の中に入つた時、涙ぐんだことがあるとか云ふことは忘れてしまつて、自分が年をとつてからそんな境界を超脱してしまつてから、自分の都合のよい様なことばかり云つて冷酷に子供を観ると云ふことが、稍もすると起るやうである。お婆さんが嫁などに對して、自分が一生の間に茶碗一つ壊したこ

とがない様なことを云つて居る、やはり正直な處は、いくつも壊したに相違はないのである。畢竟人を導くとか、育てるとか云ふ時に、只智一方で論理で行かうとするのは普通の人の稍もすれば陥る弊であるが、ほんとの生きた教師、ほんとに感化力のある親と云ふものは、先づ情で觀、同情の涙から溢れてくる教訓に由つて、始めて子供を發奮させるものであると思ふ。それで畢竟觀察の唯理的方面と共に、同情的方面を尊重せられんことを希望した次第である。(談文責在記者)

## 國 民 祭

(フレイベル會二月例會に於ける講演)

東京女子高等師範學校教授 文學士 垣 内 松 三

一  
我々は上代文化の研究上原始的民族の言語文學  
美術等と、子供のそれ等との發達を比照して、研究の資料とするのを常とする。これはいづれも、